制御構文の不定詞句の扱いについて

論文

甲斐崎　由典

岩井方男（編）
『大木健一郎先生追悼論文集』
69〜81頁

東京
1998年11月4日発行

制御構文の不定詞句の扱いについて

甲斐崎　由典

１．はじめに [1]

制御構文や繰り上げ構文の不定詞句の意味上の主語を、どのように割り出すかについては、生成文法以来盛んに議論されてきた問題で、最近登場した主辞駆動句構造文法 [2]（以下「主駆文法」と略す）でもこの問題は主たる関心部分を占めていると言って良いであろう。

ドイツ語は英語と同系言語で、英語に関して行われた議論の成果を適用し易いということもあり、ドイツ語の制御構文や繰り上げ構文についても、それ以外の言語に比べればよっぽど研究が進められていると言えそうである。

しかしながら、議論の出発点に英語の構文があるためと思われるが、この問題に関わりのありそうなドイツ語の構文が「広範に」扱われているかというと、筆者は疑問を感ぜざるを得ない。

1　本研究は、1996 年 9 月 21 日に早稲田大学ドイツ語学・文学会第 4 回研究発表会にて「生成文法の PRO（制御構文での仮想主語）について」と題して発表を行ったものに、主な枠組みとしての文法理論の変更なども含め、その後の成果を採り入れつつまとめたものである。当日会場にて貴重なご意見・ご批判をして下さった方々に感謝の意を表すると共に、上記の理由によりかなり内容が異なっていることをお断りしておく。

思えば、この学会発表の約 1 月後に大木先生の突然の訃報に接することになった。先生は、全然畑違いの学部出身の筆者の修士論文を、副査でおありながら非常に丹念に読んで下さり、研究者として必要な厳しさと、また学問を極めていくことの楽しさを教えて下さった。筆者がその後も勉強を続けて来られたのは先生のお陰でありながら、もう直接ご批評を仰ぐことができないのは返す返すもまことに残念である。今ここにその勉強の成果のひとつを捧げて、大木先生の心からのご冥福をお祈りしたい。

2　（独）kopfgesteuerte Phrasenstrukturgrammatik、（英）head-driven phrase structure grammar。

そこで本研究では、筆者の読書体験を通じて、比較的ドイツ語でよく登場する構文と思われながら、今のところこの問題についての研究では扱われていないものを取り上げ、新たな構文解析の方向性を考えることにしたい。

具体的に扱うのは、不定詞句を示す相関詞や不定詞句に修飾されている文肢を主文に含む制御構文（繰り上げ構文は扱わない）で、文法的枠組みは主駆文法とし、構文解析表記は Pollard/Sag (1994)に従う。

２．制御構文

この分野で制御構文と呼ばれる構文自体は、別に特殊な事例ではなくごくありふれたものである。

1. *Er* versuchte, den Brief mitzunehmen.
2. *Er* versprach ihr, den Brief mitzunehmen.
3. Er befahl *ihr*, den Brief mitzunehmen.

ここで、不定詞句に注目した場合、「手紙を持って行く」という動作の主語、あるいは動作主を意味的に考えると、各文それぞれ斜体にした主文の文肢がその意味上の主語に当たることは明らかである。一般的には、主文の文肢でかつ不定詞句の意味上の主語に相当するものを制御子[3]といい、この制御子は不定詞句に対して文法的にも意味的にも、句という節点を越えて様々な影響を及ぼすので、それを制御子による不定詞句の制御[4]といい、制御された不定詞句を含む構文を制御構文という。

ただし、不定詞句を含む類似の構成の文が全て制御構文として扱われるのではなく、

4. Er scheint den Brief mitgenommen zu haben.

---

3 （独）Kontrolleur、（英）controller。本論では以降も例文中の制御子を斜体にして示す。

4 （独）Kontrolle、（英）control。

のような文は繰り上げ[5]構文という。制御構文と繰り上げ構文の区別の根拠には従来から様々なものが挙げられているが、筆者が特に重視したいのは、制御構文では文内に制御子がある場合は、制御子は結局ふたつの意味役割を持つ一方、繰り上げ構文ではそうならないという点である[6]。他にも結束性[7]などの統語的な区別があるが、本論ではこれ以上触れない。

また、不定詞句の統語構造、あるいは意味内容の変化によって、主文の構成は全く同じながら制御子が変わることが観察されており、それは制御交代[8]と呼ばれる。

5. Emma bittet *Karl*, sie mitzunehmen. (Eisenberg: 381)
6. *Emma* bittet Karl, mitgenommen zu werden. (A.a.O.)

この例のような一見まわりくどい表現方法の頻度はともかく、この制御交代については、制御子の同定には、主文の動詞の分類などの機械的な構文解析だけでは不十分で、意味的な要因が多くを占めることを示すものとして、英語だけでなくドイツ語に関しても詳しい研究がいくつかある[9]。

実際のところ、意味的な分析の重要さは、他にも観察できて、そもそも（文章中にはあっても）文中に制御子がない場合や、

7. Man macht sich immer die falschen Sorgen. Sein Eigenheim, das er mit beklommener Rührung ins Auge faßte, war lichtlos, *er* konnte sich das fremde Salz mit den Duftresten von der Haut waschen. Alles war in Ordnung und verlockte dazu, weniger über ein Wiedersehen zu denken. Seine Frau schlief längst, ... (Muschg: 338)

---

5 （独）Hebung、（英）raising。

6 例えば制御構文 1.で Er は、主文では「試みる」主体、不定詞句では「持って行く」主体のふたつの意味役割を担うが、繰り上げ構文 4.の Er は、意味役割としては不定詞句での「持って行った」主体という意味役割だけが考えられる。

7 Kohärenz。詳しくは Bech、Eisenberg・383 頁などを参照。

8 （独）Kontrollwechsel、（英）control shift。

9 Köpcke/Panther、Wegener、Abraham、Ruzicka (1983a、b)などを参照。

統語論的には主文の主語と言えないものも制御子になる場合があり、

8. *Dr. Orlow* hat sich mit *mir* und auch mit *anderen Fachleuten* vergeblich bemüht, eine bessere, einigermaßen wissenschaftliche Erklärung zu finden. (Dominik: 9)

最近の研究の傾向として、不定詞句の意味論的・言語運用論的分析を通して制御子の同定を試みることが多いようである。

３．ドイツ語的問題点

さて、英語を対象としているかドイツ語を対象としているかにかかわらず、今までの制御についての研究を見ていくと、大まかに言って次のようなふたつの特徴があることがわかる。

まず、対象とする構文が、もっぱら例文 1.から 6.に挙げたような「標準的」なものに限られていることである。このような標準的な制御構文は、制御問題が意識され始めた頃から中心的に扱われてきたものであり、それだけ研究も進んでいると言えるわけだが、英語に関しては筆者はよくわからないが、ドイツ語の様々な不定詞句の状況を捉えるには、いささか物足りないと言わざるを得ない。もっとも、まず始めに最も基本的な構文を詳しく検討してから手を広げていくことは言語理論の構築の上で大事なことではあるが。

実際、ドイツ語を読んでいてよく出くわす不定詞構文としては、例えば次のようなものが挙げられよう。

9. Sie spürte, daß es *ihr* schwerfiel, sich zu konzentrieren. (Gercke: 18)
10. Erleichtert stellte sie fest, daß *die beiden* keine Anstalten machten, auf der gegenüberliegenden Straßenseite zu suchen. (Gercke: 17)

これらは、第 1 節で述べたように、本論で分析対象とする構文でもあるわけだが、9.は、不定詞句がまず主文に相関詞によって示されている場合の例で、10.は不定詞句が主文の文肢の修飾語である場合の例である。もちろん、これ以外にも例文を挙げるまでもなく um zu や ohne zu で始まる不定詞句や、sein や haben など

と結びついた不定詞句などは代表的なものであろう。

また、制御を扱った今までの研究に共通しているもうひとつの点は、不定詞句内に、何らかの制御を受ける対象として意味上の主語を想定することの是非は議論済みとしていることである。もちろん、統語論を離れて、単にある文（文章）の意味を考えるときに、不定詞句の意味上の主語が何か、ということが説明できなくてはその文を理解したことにならないので、不定詞句の意味上の主語というものは、文の「解釈」という場面では当然必要な考え方であろう。しかしながら、伝統的な文法では明確に一種の名詞として扱われることもある不定詞句の構文解析において、明示的にせよ暗示的にせよ不定詞句を文と同等物と見なして主語を想定する必要性について、議論が行われることはあまりないようである。

ただ、構文解析の段階から不定詞句に意味上の主語を想定する[10]ことは、主駆文法に限らず多くの文法理論で、最近は語彙情報、つまり下位範疇化素性が以前よりも重視されていることと関連があると思われる。主駆文法でも、この下位範疇化素性の中心情報として、ある語彙が義務的に、または自由選択的に他にどんな文肢と結びつくかという情報を想定しているが、文全体の解析、すなわち単一化が終了した時点で、例えば主辞となっている動詞の下位範疇化素性がきちんと満たされていない、つまり主語や目的語が欠けていると解析は失敗だったことになってしまうのである。これを防ぐためには、何らかの方法で主辞の要求する文肢を過不足なく提供してやる必要があり、また特定の構文だけに特化した規則を新たに導入することは、最近の文法理論というか主駆文法の基本的な路線に反しており、理論全体の整合性を崩すことになりかねないのである。

ところで、9.と 10.の例文を見ればわかる通り、これらの構文では、不定詞句の方の下位範疇化素性の問題はともかく、主文の方では下位範疇化素性で要求される文肢が揃ってしまっていて、そもそも不定詞句がそのままでは主文に組み込

10　大雑把に言ってしまえば、生成文法では不定詞句を一種の完全な文と見なし、その主語の位置に PRO という「見えない」文肢を想定するが、主駆文法では不定詞句は主語のないむき出しの動詞句として分析し、意味の解析（syn-sem 素性の単一化）の場で、不定詞句の制御子が決められる。一見すると、主駆文法では構文解析から意味上の主語の存在が駆逐されているようであるが、syn-sem 素性には制御子に相当する文肢と単一化を行う素性が明確に含まれており、また構文解析と意味解析が同時に行われるという建前があるので、主駆文法でも構文解析上不定詞句に意味上の主語は必要となる、と筆者は考える。

めないことがわかる。すなわち、明らかに文中の要素であるもの[11]が、文の情報の単一化過程から宙ぶらりんの状態にとどまってしまうのである。9.のような構文はともかく、10.のような構文での不定詞句は従来までは「付加」現象と呼ばれてきたものであるが、まだ新しい文法理論である主駆文法ではこのような文法現象に関してまだはっきりした考え方が提出されていない。その理由のひとつとしては、主駆文法では構文解析、つまり主辞が要求する文肢を主辞と単一化していく過程で、同時に意味論的な情報も単一化していくことから、結びつく品詞の種類からしてかなり自由度の高い付加現象は、情報の単一化にとってはやっかいな代物であり、統一的な説明がし難いことが考えられる。すなわち、一言で言ってしまえば、現状では主駆文法で 9.や 10.のような構文の不定詞句、あるいは制御現象はうまく説明ができない、ということになる。

ここに来て筆者は、敢えてここで挙げたふたつの既存の大前提、すなわち不定詞句に意味上の主語を想定することと、語彙情報だけによる構文解析にひとまず疑問を投げかけてみたい。とはいえ、まだ新しい文法理論に対して、そのような新提案が理論全体にどのような影響をもたらすかについては、ここで議論する余地はないので、本論では 9.や 10.のような文の構文解析に問題を限定することにしたい。

４．意味上の主語の廃止案

４．１．構文例

まず、本論で問題としている構文の例をまとめてみよう[12]。

9. Sie spürte, daß *es* ihr schwerfiel, sich zu konzentrieren. (Gercke: 18)

11. Nun, dann ist *es* unsere Sache, Ihnen diese kurze Zeit recht angenehm zu machen.

11　es などの相関詞が文肢であるかの議論にはここでは立ち入らない。意味論的な情報も構文解析と同時に単一化していく主駆文法では、相関詞の「文肢性」は一層疑問ではあるが、ここでは単に主辞の要求する結合価を満たすもの、と考える。人見などを参照。

12　ここでは不定詞句が結びつくと思われる文肢を斜体にした。

(Dominik: 14)

12. Sie war gerade *dabei* gewesen, mit der Serviererin im Spielsalon anzubändeln, als die Feuerwehr die Straße entlanggerast kam. (Gercke: 15)

10. Erleichtert stellte sie fest, daß die beiden *keine Anstalten* machten, auf der gegenüberliegenden Straßenseite zu suchen. (Gercke: 17)
13. Der Konkurs, *die Notwendigkeit*, sich neue Lebensmöglichkeiten zu verschaffen, hatten ihn gezwungen, ein anderes, verwandtes Problem in Angriff zu nehmen. (Dominik: 18)[13]
14. Es fand dann irgendeine kleine Schauspielerei statt, die *den Zweck* hatte, sie an seine Müdigkeit zu erinnern, keine erhebliche, die sie beide betraf, nur die allgemeine von vorhin. (Muschg: 336)

9.と 11.と 12.はいずれも主文（不定詞句を従えている文）に取り敢えず不定詞句が相関詞によって予告されている例で、10.と 13.と 14.は不定詞句が主文の名詞を修飾している例である。いずれの構文でも、主文において、不定詞と結びついている文肢は、主語であったり（9.と 11.）、主語の一部であったり（13.）、目的語であったり（10.と 14.）、相関詞の語形からもわかる通り副詞的であったり（12.）様々である。

４．２．意味上の主語の必要性の再検討

不定詞句に意味上の主語を想定することには、いくつかの観点から反論を加えることができると思う。

まず、わざわざ文という形式をとっていないものに、文にだけ必要な主語を想定することに対する、直感的な反感である。といってもこれだけでは科学的な議論にならないので少し根拠を挙げてみよう。

ドイツ語の不定詞句には、目的語など他の文肢がいろいろと含まれていても、

13　本論との関わりでここで注目すべきは前の verschaffen を含む不定詞句の方である。

主語だけは絶対に現れない[14]のである。伝統的な文法でも、動詞に zu を付加して不定形にすることは、動詞を名詞化する一種の手段であるかのように論じていることが多い。そして「名詞化」ということのひとつの重要な意義は、動作を動作そのままとして取り出す、つまり動作主に言及せず動作を表す、ということではないだろうか。

ここで思い当たるのは、意味的にはかなり動詞の不定形に近いと思われる、名詞化した動詞の不定形や、-ung で終わる動詞由来の名詞である。後者の方は、語形から動詞に近い（Zerstörung など）かそうでないか（Wohnung など）判断することが難しいが、前者の、書く場合には単に動詞の最初の文字を大きく書くだけでいい名詞化動詞は、動詞らしさがはっきりしていると言える。

15. Was er ihm da erzählte, erregte bei Dale zunächst nur ungläubiges Kopfschütteln. (Dominik: 94)
16. Während des Wartens in der Bude hatte sie ein leichtes Zeichen im Rücken gespürt. (Gercke: 87)

このような例の場合、Kopfschütteln や Warten にいちいち主語を想定する必要があるだろうか。もちろん前述の通り、文の「解釈」上はそれらの動作を行ったのは誰か明白にわかるが、かといってこれらの文を構文解析するときに、完全に名詞化されている動詞に、元は動詞であったことまで遡って主語を想定することは、単に理論の煩雑さを招くだけではないだろうか。

また、一般的に案外多いのが 7.や

17. Die peinlichst genau durchgeführte Untersuchung ergab jedoch nichts, das geeignet gewesen wäre, den Schleier des Geheimnisse zu lüften. (Dominik: 8)

のような、文内には制御子が見当たらない場合である。文内に制御子が見当たらなくて構文解析で苦労するならば、そもそもそのような制御子を要求する不定詞句の主語というものを除けばいいことにはならないだろうか。これは 8.のように

14　ここでは zu 不定詞句と話法の助動詞的に結びつく sein、haben、brauchen などによる一連の定形構文は除く。

文内に制御子はあるが、相当複雑な単一化機構を考え出さないと、制御子全てがうまくひとつの不定詞の主語の位置に集まってくれない場合にも言えよう。

まとめると、zu を付加して不定詞句を作ることは、動作主に言及しない状況を作り出すことを意味し、その不定詞句に再び動作主を想定することは、不定詞句の統語特性・意味特性に反するのではないか、ということになろう。

４．３．構文解析の試み

前項では結論として、不定詞になった動詞には、意味的であろうがなかろうが主語は無用と考えることを提案したわけだが、やはりそうなると前述した通り動詞の語彙記述に含まれる下位範疇化素性との齟齬が問題となろう。この問題の回避には、3 節で述べたように、理論全体の整合性に反してしまうことになるが、特定の構文にだけ適用されるような新たな規則、つまり主駆文法では語彙規則を導入せざるを得ない[15]。

18. 不定詞句変換語彙規則

$$\begin{bmatrix} \text{CAT} & \begin{bmatrix} \text{HEAD} & \textit{verb} \\ \text{SUBCAT} & \langle \text{NP}[\textit{nom}]\boxed{1}, \text{NP}[\textit{dat}]\boxed{2}, \text{NP}[\textit{acc}]\boxed{3} \ldots \rangle \end{bmatrix} \\ \text{CONTENT} & \begin{bmatrix} \text{RELN} & ? \\ ? & \boxed{1} \\ ? & \boxed{2} \\ ? & \boxed{3} \end{bmatrix} \end{bmatrix} \longrightarrow$$

15　周知のように、特定の構文にだけ適用される語彙規則として、受動態変換を行うものが既に主駆文法にはあるが、これも動作主を除外、あるいは主語の位置からはずすために導入された語彙規則であるという点では、不定詞句についての筆者の主張と共通点がある。しかしながら、筆者はまだ自分の提案が理論全体でどのような問題を惹き起こすか検討中であり、この共通点を自分に有利な論拠として積極的に強調するものではない。

$$\begin{bmatrix} \text{CAT} & \begin{bmatrix} \text{HEAD} & \textit{noun} \\ \text{SUBCAT} & \langle \text{NP}[\textit{dat}]\boxed{2}, \text{NP}[\textit{acc}]\boxed{3}\ldots \rangle \end{bmatrix} \\ \text{CONTENT} & \begin{bmatrix} \text{RELN} & ? \\ ? & \boxed{2} \\ ? & \boxed{3} \end{bmatrix} \end{bmatrix}$$

この規則は、zu が付加されて不定詞句になったとき、単純に主語に相当する項目を削除し、さらに主辞素性を動詞から名詞に変えることを指示している。

これを具体的に例えば 9.の例文の、konzentrieren を不定詞句にするときに適用してみると次のようになろう。

19. konzentrieren の不定詞句変換

$$\begin{bmatrix} \text{CAT} & \begin{bmatrix} \text{HEAD} & \textit{verb} \\ \text{SUBCAT} & \langle \text{NP}[\textit{nom}]\boxed{1}, \text{NP}[\textit{acc}]\boxed{2} \rangle \end{bmatrix} \\ \text{CONTENT} & \begin{bmatrix} \text{RELN} & \textit{konzentrieren} \\ \text{KONZENTRIERER} & \boxed{1} \\ \text{KONZENTRIERT} & \boxed{2} \end{bmatrix} \end{bmatrix} \longrightarrow$$

$$\begin{bmatrix} \text{CAT} & \begin{bmatrix} \text{HEAD} & \textit{noun} \\ \text{SUBCAT} & \langle \text{NP}[\textit{acc}]\boxed{2} \rangle \end{bmatrix} \\ \text{CONTENT} & \begin{bmatrix} \text{RELN} & \textit{konzentrieren} \\ \text{KONZENTRIERT} & \boxed{2} \end{bmatrix} \end{bmatrix}$$

５．まとめ

本研究で筆者は、相関詞や名詞句に結びつく不定詞句を主駆文法で構文解析する場合に、従来までとは違う考え方に立脚し、不定詞句から主語に関する情報を除去し、かつ不定詞句自体を名詞化する語彙規則を提案した。

これにより、例えば 9.のような相関詞で予告されている不定詞句は、相関詞の CONTENT 素性の値が不定詞句から供給されるとすることで、相関詞とうまく単一化することが可能となりそうである。

また不定詞句が主文の名詞を修飾している場合も、主駆文法では付加に関して統一的な扱いがまだ提案されていないが、主辞素性が名詞である句どうしの単一化ということになるので、そう複雑な手順は必要ではなくなると考えられる。

とはいえ、このような語彙規則と不定詞句の扱い方を、もっと広範に検分することが今後の最重要課題であり、その意味では本研究はあくまで作業仮説だけを吟味した段階とも言えよう。

６．参考文献

（1 次文献）

Dominik, Hans (1994): Der Befehl aus dem Dunkel. Augsburg.

Gercke, Doris (1990): Der Krieg, der Tod, die Pest. Hamburg.

Muschg, Adolf (1992): Ein ungetreuer Prokurist. In: Silatan, Götz (Hrsg.) Sommerferien. Frankfurt a.M./Leipzig, S. 333-344.

Abraham, Werner (1983): The control relation in German. In: Abraham, Werner (Hrsg.) On the formal syntax of the Westgermania. Papers from the "3rd Groningen grammar talks", Groningen, January 1981 (= Linguistik Aktuell 3). Amsterdam/Philadelphia, S. 217-242.

Bech, Gunnar (1955): Studien über das deutsche Verbum infinitum. København.

Borsley, Robert D. (1996): Modern phrase structure grammar (= Blackwell textbooks in linguistics 11). Oxford/Cambridge, Massachusetts.

Borsley, Robert D./Suchsland, Peter (Deutsche Bearbeitung) (1997): Syntax-Theorie (= Konzepte der Sprach- und Literaturwissenschaft 55). Tübingen.

Ebert, Robert Peter (1975): Subject raising, the clause squish, and German scheinen-constructions. In: Grossman, Robin E./San, L. James/Vance, Timothy J. (Hrsg.) Papers from the eleventh regional meeting, Chicago linguistic society. Chicago, S. 177-187.

Eisenberg, Peter (1994[3]): Grundriß der deutschen Grammatik. Stuttgart/Weimar.

Fujinawa, Yasuhiro (1997): Zur Identifikation des sogenannten logischen Subjekts beim deutschen zu-Infinitiv. In: エネルゲイア 22, S. 38-60.

Helbig, Gerhard/Buscha, Joachim (1991[14]): Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. Berlin/München.

Hoeing, Robert G. (1994): Empty, expletive, and missing subjects in German (= Berkeley insights in linguistics and semiotics 11). New York/Washington, D.C.

Köpcke, Klaus-Michael/Panther, Klaus-Uwe (1991): Kontrolle und Kontrollwechsel im Deutschen. In: Zeitschrift für Phonetik, Sprachwissenschaft und Kommunikationsforschung 44.2, S. 143-166.

Nerbonne, John/Netter, Claus/Pollard, Carl (1994): German in head-driven phrase structure grammar. Stanford.

Pollard, Carl/Sag, Ivan A. (1994): Head-driven phrase structure grammar. Stanford/Chicago.

Pollard, Carl/Sag, Ivan A. (1987): Information-based syntax and semantics. Stanford/Chicago.

Ruzicka, Rudolf (1994): Gegen die Aufgabe von PRO. In: Steube, Anita/Zybatow, Gerhild (Hrsg.) Zur Satzwertigkeit von Infinitiven und small clauses (= Linguistische Arbeiten 315). Tübingen, S. 13-18.

Ruzicka, Rudolf (1983a): Autonomie und Interaktion von Syntax und Semantik. In: Ruzicka, Rudolf/Motsch, Wolfgang (Hrsg.) Untersuchungen zur Semantik (= Studia grammatica 22). Berlin, S. 15-59.

Ruzicka, Rudolf (1983b): Remarks on control. In: Linguistic inquiry 14.2, S. 309-324.

Wegener, Heide (1989): „Kontrolle“ — Semantisch gesehen. Zur Interpretation von Infinitivkomplementen im Deutschen. In: Deutsche Sprache 17, S. 206-228.

川島　淳夫（編）（1994）『ドイツ言語学辞典』、東京。

人見　明宏（1992）「相関詞 es の統語論上の位置づけについて」、『Angelus Novus』20 所収、60 ～ 77 頁。